女

K-poco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女

【Ｎコード】
Ｎ２８８１Ｖ

【作者名】
Ｋ－ｐｏｃｏ

【あらすじ】
純粋な朱那。
でも実は…
こんな女性もいたりいなかったり。

女って…なんだろう。

そう思いながら制服に着替えまた今日が始まる。
「朱那ー起きてんの？朝ご飯できてるわよ」
「起きてる！今行くよー」
リビングに走って向かうと紺の膝上５センチくらいのスカートと白のスカーフが風に揺られる。
「おはようお母さん！」
「おはよう」
リビングに入るとパンと溶けたバターの香りが鼻をくすぐる。
「やった！今日はトーストね？」
「朝は飯だろ」
笑顔でお母さんに近づく途中後ろで１番逢いたくない人物の声がした。
「なんでいんの巧斗…」
「朱那が呼んだんじゃんかよ」
「はぁ！？呼んでないし！」
「呼んだだろ？心の中で…悲しい苦しい…巧斗助けて！って」
「……」
そこにいたのは幼なじみの巧斗…
意味がまったくわかんない馬鹿。
「あ！おばちゃんおにぎり頂戴！」
リビングにある２人掛けのソファーのど真ん中に１人でどっかり座っている姿がさらに横着感を醸し出す。
「あ…あんたねぇ人んちでそんなわがまま…」
怒りに満ち溢れた拳がプルプルと震える。

「いいのよ朱那。巧斗はうちの長男坊だから」
「おー！さすがおばちゃん！！話分かるねぇ」
「お母さんは優しすぎるのよ…」
馬鹿みたいな2人をほっといてあたしは席について大好きなトーストをほおばった。
「おぃちぃ！」
「お前幼稚だな」
あの嫌な声が耳にはいる。
「うるさいなぁ…」
あまりのトーストを一気にほおばると急いで自分の部屋に入った。
「はぁ…なんなのあの人ー！」
いそいで髪の毛をセットしスクバをからうと急いで家を出た。
明るめの腰までである長い髪を風になびかせながらスタスタと小走りに近い速さで歩く。
「おい！朱那待てよ！」
自転車の音とともにあいつがくる。
「なんなの！？」
怒り狂った表情で巧斗を睨む。
「昨日は悪かったって！許してくれよぉ！」
「なんで許さなきゃいけないわけ！？」
「ごめんって…」
「だいたいデートの邪魔しておいてよく平然とあたしの前に現れれるよね！！」
あたしが巧斗に怒ってるのは昨日の朝にさかのぼる。
光聖とのデートがあったのに巧斗のせいで中止に…
しかも光聖との間にちょっと亀裂が…
「昨日のは事件やろ！そんなことまだ怒っとるん！？」
「じ…事件だって！？あんたがあたしを部屋から出さなかったんでしょ！？」
巧斗の肩を強く押して小走りで離れる。

「まてよ！！」
ガシャンと自転車が倒れる音がして体がなにかに包まれる。
「は…離してよ！！」
「やだ…」
「ねぇ！！」
巧斗の大きくてでも細く感じる体が背中に密着する。
「あいつのとこになんか行ってほしくねぇんだよ！！」
「誰あいつって…」
巧斗の太い腕に力が入る。
「光聖」
「なんで…」
「俺の方が朱那のこと好きなんだよ！前から…小さいころから好きなんだよ！！」
「嘘だ…」
「え？」
巧斗の手を思いっきり振り切ると勢いよく巧斗の頬にビンタした。
「勝手なこと言わないでよ！！言うの遅い」
そう言い残してダッシュでその場から離れた。
「おはよ朱那！」
「あ！美波。おはよ」
後ろからクラスメートが声をかけてきた。
「昨日光聖とのデートどうだった？」
「デートしてない…」
「えぇ！？なんで！？」
「巧斗が部屋から出さしてくれなかったの…」
「はぁ！？なにそれ！！」
美波があたしの肩を少し押す。
「あたしにも分かんないよ…巧斗は悪気なかったっぽいけど…」
「前から思ってたんだけどさ朱那って酷いよね」
「え？なにが？」

あたしはキョトンと美波を見る。
「あたしが巧斗くん好きなの知ってるよね？なのにさ！朱那はいっつも巧斗くんの自慢話っていうかそんなんばっか…」
美波は俯きながらあたしを睨む。
「ご…ごめん！あたしそんなこと気づかなくて…」
「なに気づかなかったって！そういうところなんかうざいんだよね」
美波はそういうとあたしの目の前から走っていなくなった。
「どうしよう…」
泣きそうなあたしは重い足を引きずり学校へ向かった。
キーンコーンカーンコーン
「ねぇ美波どうしたの？」
「あ　聞いてよ紗綾！朱那がさぁ巧斗くんの自慢話ばっかしてくんの！！」
「えっ！？美波が巧斗くん好きなの知ってて？」
「そうだしぃ」
「は！？きも…まじ最悪じゃん」
「でしょ！？まじハブらない？」
「それいい！！」
教室に入れなくなったあたしの足はガクガクに震えていた。
「朱那…いたんだ」
「え！？あ…美波…」
いきなり呼ばれたあたしは体が大きく震えた。
「今の話聞いた？」
「う…うん」
嘘だよね？美波があたしにそんなことしないよね…
「う…嘘だよね？」
勇気を出したものの体がついてきていない。
さっきから冷や汗と生唾がとめどなく止まらない。
「うん！！冗談に決まってるじゃん！！」
は…良かった…

「なんてあたしが言うと思った？」
「キャァ」
突き飛ばされたのと美波の言葉がダブルであたしを貫いた。
「みな…み…」
目頭が熱くなる。
「あら泣いちゃうの？早いな」
鼻で笑う美波を前にあたしはただ泣くしかできなかった…
「なんで！？だって今までずっと一緒だったじゃん…」
「演技よ。あんたがいないと巧斗くんに近づけないじゃん」
「それってあたしを…」
考えるだけで心が縛られる。
「そう…使ってたの」
あたしの頬に生温かいものが流れていく。
あたしのなかでなにかがガラスが割れるような音とともに壊れていったのがわかった。
「だいたいあんたなんかと一緒にいたい奴なんかいないでしょ」
「美波のいうとおりだよね」
まわりのみんながまってましたかというようにあたしを囲んでいく。
「謝るんなら許してあげるよ？いまのうちだけど」
「土下座しろよ」
「いーねーそれ！」
「どーげーざ！どーげーざ！」
土下座コールに耳をふさぎながら床に膝をつく。
耳をふさいでいた手も床につく。
「ひゅー！」
「いいながめだね」
一気にその場があたしの土下座で盛り上がる。
なんであたしがこんなこと…負けられるか！
「なんなの？」
「は？」

「なんでなの？」
勇気といっても体が震えてる…
そこであたしの勇気はストップ。
反論したいけど怖くてできない…
なんでみんなすぐ敵になっちゃうの？
「なにがいいたいんだよ！」
下げていたあたしの頭に重みがかかる。
「美波！流石にやりすぎだよ！」
「こんぐらいしないと落ち着かないの」
美波はそういってあたしの頭の上にある足を左右に動かし始めた。
「いじめじゃんこんなの」
「私いじめとかいやだよ」
「うちも」
あたしの周りからどんどん人影が消えていく。
「は？なんでみんな！何でよ！」
「言わせてもらうけど美波。あたし美波の話し聞いて朱那が悪いと思った。でも…今の朱那見てたら朱那が悪いなんていえないよ」
「なにいってんの紗綾！こいつが悪いにきまってんじゃん？」
少し顔をあげたあたしの前で美波と紗綾が言い合いをしていた。
「美波あんた朱那のどこを見てたの！？こんなに近づいてんのにわかんないの！？」
「なにがよ？」
なにがだろう…紗綾はあたしを助けてくれてんの？
「朱那の近くに落ちてる朱那の携帯画面見てみなよ！」
勢いよくしゃがみこんであたしの携帯をとった美波にも涙が浮かんでるのがわかった。
「これ…」

ｄｅａｒ　巧斗
さっきはごめん。

あたし美波に幸せになってほしいから巧斗とは付き合えない。
あたしには光聖がいるもん。
正直あたしも巧斗のこと好きなんだけどね
あたしたちはただの幼なじみ。
そう考えないと生きてけないよ。
これからも大好きだよ？幼なじみとしてね！
ｆｒｏｍ　朱那

「朱那がどんだけ美波を思ってたかわかる？実際美波が朱那から聞いてた自慢ってただ朱那が美波に巧斗くんのこと話してあげてたんじゃないの？」
「そんな…あたし朱那にすっごい悪いことしたじゃん…」
意味わかんない！さんざんあたしを追い込んだのにいまさらなに泣いてんの！？
これだから女ってわかんないんだ。
「朱那…謝っても許してくんないかもしれないけど…」
「美波。謝んなくていいよ」
だいぶ痺れてきた足を思いっきりのばすと美波の目の前に立った。
「謝られてもどうも思わない」
そう言いのこしてあたしはその場を去った。
♪～？♪～？
「もしもし」
『あ！もしもし朱那！？俺おれ！光聖！』
「分かってるよ」
『この前はごめんな？巧斗にはお仕置きしといたから』
「どんなの？」
『石谷　美波と付きあうって約束した』
「いいねえ！よくやったね」
『あたりまえよ？朱那を俺のものにするんならこんくらいしないと！』

「ありがとう！あたし光聖大好きだよ？」
『俺もだよ。朱那』
「じゃあまたあとでね」
『おう！いつものホテルでまってる』
「わかった。ばいばい」
『今夜も可愛がってやるよ』
光聖との電話が切れたところでまた携帯が鳴る。
「もしもし」
『朱那？あ…あのさ…まだ怒ってる？』
「怒ってないけど」
『ならよかった。今からさデートとか』
「あのさ美波と付き合うんでしょ？あたしなんかといていいわけ？」
『俺…そんな気…』
「まあしてあげてもいいけど」
『まじか！？』
「でもあたし１０時から光聖とＨだからそれまでいい？」
『光聖と！？やめ…』
「巧斗にとめる権利はないよ」
『くそ…じゃあ７時に俺んちこい。誰もいないから』
「わかった」
『光聖にはまけてらんねえ』
「じゃばいばい」
『絶対こいよ』
巧斗との電話も切り巧斗の家に向かう。
女ってなんだろう…
やっぱり男を駒にしてこそ本当の女よね。
男がいれば他の女なんてちょろいもんよ。
誰もあたしに使われてるって気付かない。
いい君よね…
今夜は２人に抱かれる。

明日は何人だろう。
いろんな男があたしに染みついてる。
特に巧斗と光聖かな…
みんな気付かないのよね…
５人に１人は危険な女だってさ。

（後書き）

ちょっと冒険してみました（＾＾）
かる～く受け流してください。
よんでくださってありがとうございます？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2881v/

女

2011年10月8日22時12分発行